

思考の昼と夜

—『序説』から『アガート』へ—

今井 勉

ヴァレリーのテキストはどれも一筋縄ではいかないが、とりわけ『アガート』は難解である。『アガート』の暗闇に微光を注ぎ、読解のさしあたりの手掛かりだけでもつかみたいと思った時、ヴァレリー思想のマニフェスト『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（以下『序説』）が灯台役を果たすのではないかと考えられた。小論では、『アガート』と『序説』のテキスト比較を試みつつ、両者の共通点と相違点を浮き彫りにすることによって、『アガート』読解のための若干の手掛かりを示したいと思う。

第1節 思考の劇

1-1 一般性志向と「思考＝変化」の命題

「内面には、一つの劇がある」¹と記した『序説』も、「考えれば考えるほど私は考える」で始まる『アガート』も、ともに思考の劇を真正面から取り上げたテキストという点で共通している。

思考の劇の主人公には、それぞれ名前がある。一方は「万能の天才」レオナルド・ダ・ヴィンチであり、他方は「眠りの聖女」アガートである。しかし、二つのテキストに、それぞれの名前にまつわる特殊個別的な解説の類を求めるとすれば、その期待は完全に外れるだろう。たしかに、『序説』のヒーローは「レオナルド」という名前を持ち、『アガート』のヒロインは「アガート」という名前を持ってはいる。しかしながら、『序説』におけるレオナルドとは歴史上の一個人ではなく、ヴァレリーが想像した一つの「力学的なモデル」²なのである。卓越

¹ 《Intérieurement, il y a un drame.》（*ŒI*, 1158）

² ヴァレリーは1893年末頃から『序説』執筆当時にかけて、英国の物理学者マクスウェルの『電磁気論』とトムソン（ケルヴィン卿）の『科学講演録』を熱心に読んでいる。「力学的モデル」は特にマクスウェルの書物から学んだ言葉。『序説』のみならず、当時の『カイエ』や書簡でもよく用いられる鍵語である。二例挙げておく。①1894年の『カイエ』の断章。「ある頭脳、ある個人の力学的モデル（レオナルドのために）」（*C, ŒI*, I, 393）②『序説』の執筆に

した精神とはどう機能するのかという問題を扱うヴァレリーは、卓越した個人に対する盲目的な称賛や実証主義的な博識の列挙による論じ方を徹底的に排除する。レオナルド・ダ・ヴィンチは偉大な天才であると言ったり、いつどこで生まれ何をしたかを詮索したりする批評はヴァレリーにとってはどうでもよいことなのである。彼は、精神の運動を個性と結び付けて捉えるのではなく、非人称的または一般的なレベルで考察し、精神の非人称化・匿名化を目指していると言ってよい。

また、『アガート』における「私」も、眠りの聖女であること、女性であることの特異性を意図的に剥奪されている³。このテキストに女性・男性という性に関わる印象は皆無である。『アガート』の「私」は、むしろ中性的な任意の精神という位置まで非人称化・匿名化されていると言う方が正しかろう。つまり、二つの思考の劇において、主人公はともに、それぞれ象徴的な名前を与えられながらも実質的には非人称化・匿名化されているのだ。ヴァレリーは、二つのテキストで、特殊な個人の精神における何か特殊な思考を描こうとしたのではなく、どの精神にも共通するはずの思考のメカニズムを一般的に描こうと試みているのである。思考のメカニズムの記述に一般性を持たせようとするならば、当然ながら、記述は抽象的にならざるをえない。『序説』でも『アガート』でも、抽象名詞が非常に多く用いられているのは、思考を一般的に記述しようとするヴァレリーの根強い一般性志向がもたらす必然と言える。そして、このような抽象度の高さが、二つのテキストを私たちに近づくににくいものにしていく大きな要因であると思われる。

ところで、ヴァレリーは思考の最も基本的な特徴を何に求めているだろうか。初期の『カイエ』を読むと、ヴァレリーは「思考」をしばしば「変化」と結び付けて定義していることがわかる。たとえば、『カイエ』第一冊『航海日誌』には次のような記述がある⁴。

取り掛かる頃、兄ジュールに宛てた書簡の一節。「兄さんの興味を引くかどうかわかりませんが、テーマは次のようなものです。僕は芸術や博識のことは無視します。ダ・ヴィンチ的な精神のひとつの（力学的なモデルという意味での）モデルを確立したいと思っています。」（*Colloque Paul Valéry, Amitiés de jeunesse, influences-lectures*, Nizet, 1978, pp.220-221）

³ 『アガート』の「私」《Je》は文法的に男性である。

⁴ *C, EI, I, 76, 105, 112*

精神においては何物も固定しない。諸々のイマージュは同一のまま持続するということがない。

実際、思考すること＝変化すること。

絶えず自分が何物かとは異なると表明する、それが思考することである。

いずれにおいても、思考の本質は「変化」の内に見出されていると言ってよいだろう。更に、カイエ『航海日誌』には、これらの例に加えて、もう一つ興味深い断章がある。

常に私は考えている —— 別のことを⁵。

「別のことを考える」という文句は、『序説』と『アガート』の両方に直接つながる表現である。『序説』のレオナルドは「常に別のことを考えているように見える魅力」⁶を持った精神として提示されているし、一方『アガート』冒頭の「考えれば考えるほど私は考える」のヴァリエーションの一つは、「しかし、別のことを」⁷という一句を従えているのである。あるものから別のものへ、思考は次から次へと変化する。これが若いヴァレリーの根本命題であった。

以上のように、『序説』と『アガート』を結ぶ基本的な共通項は、まず第一に、思考を特殊な個人や個性との関わりにおいてではなく、非人称的・一般的なレベルにおいて捉えようとする一般性志向、そして第二に、思考の本質を「変化」に見出す「思考＝変化」の根本命題である、とひとまずまとめておくことができるだろう。この二点を確認した上で、次に、より具体的な共通点を、二つのテキストに即して観察しよう。

1-2 思考の法則への欲望

『序説』と『アガート』の具体的な接点を探るには、『序説』の中で「夢」という単語の現れる二つの段落、すなわち第十段落と第十六段落が手掛かりになる。（『序説』は全部で五十四段落から成る。以下便宜上『序説』第十段落をL 10

⁵ *ibid.* 55

⁶ «il a le charme de sembler toujours penser à autre chose...» (*ÆI*, 1155)

⁷ «Plus je pense, plus je pense, mais à autre chose.» (*AGms*, f°13)

のように略記する)。あらかじめ指摘しておくならば、L 10 と L 16 は『序説』全体の中でも、とりわけ難解な印象を与える部分である。L 10 は、若いヴァレリーの熱烈な「極限」志向から来る一種神秘的な雰囲気すら漂わせているし、L 16 では、世界を観る自我が根源的かつ抽象的に、しかも大胆に描かれている。ともに極めて密度の濃い箇所なのである。難解な『アガート』の手掛かりを探しているうちに、『序説』のこれもやはり難解な箇所にぶつかるというのは、皮肉といえれば皮肉である。しかし、見方を変えると、L 10 と L 16 で扱われたテーマが少しずつ形を変えて成長し、『アガート』に発展していった、と考えることもできるだろう。

それでは、最初に、L 10 と『アガート』の比較から始めよう。L 9 で、思考を思考するメタ意識⁸の主題を展開したヴァレリーは、続く L 10 で、「目覚めて眠る人の夢」という奇妙な比喩を持ち出しながら、実際には実現不可能としか言えないような「欲望」の出現について次のように書き付けている。

このような観察あるいは[思考の思考という意味で]心的な二重生活は、通常の思考を目覚めて眠る人の夢の状態へと還元するのだが、この心的二重生活のある一点に至ると、[...] その夢の一続きが、[...] 知覚しうる規則性をもって、機械のようにはっきりとした連続性をもって展開されているように見える。そのとき、次のような考え(あるいは欲望)が現れる、このように次々と続いてゆくもの[通常の思考]の流れを速め、その流れの諸項をその**極限**、諸項の想像しうる限りの表現(式)の極限まで、**そのあとではすべてが変化してしまうであろう極限まで運ぼう**という考えあるいは欲望である。そして、仮に意識的であるというこの様態が習慣的なものになれば、例えば、予想されるある行為の可能なすべての結果、心に抱くある対象のすべての関係を一挙に考察するに至るだろう [...]。⁹

⁸ 「メタ意識」とは、思考についての意識、通常の思考を対象化する意識という意味である。例えば言語学で「高次理論」や「メタ定理」と言えば、それぞれの自然言語の個別文法についての一般理論を指すように、メタ意識はさまざまな心的現象についての意識を指す。「精神のオペレーション」(L4)について一般的に考察し記述するヴァレリーの行為は、思考についての高次理論を作る行為と言えるだろう。メタ意識は『カイエ』においても重要テーマの一つである。例えば1900年の『カイエ』の次の断章。「意識は思考を思考として我々に示す。したがって、意識は思考する主体を個別の特殊な思考から絶えず引き離すのである。」(C, EI, III, 41)

⁹ OEI, 1162

このテキストを注意深く読むと、『アガート』とよく似ている点が二つあることに気がつく。

まず、第一の類似点は「目覚めて眠る人の夢」のテーマである。ヴァレリーは、思考を思考する「心的な二重生活は、通常的思考を目覚めて眠る人の夢の状態へと還元する」という。「目覚めて眠る人の夢」とは面白い矛盾語法であるが、「目覚めて」いるのはメタ意識、「眠る人の夢」は通常的思考をさすものとするれば、その意味するところは結局、覚醒したメタ意識が眺める通常的思考ということであらう。

一方、『アガート』では、外面的には「眠る人」がその夢を内面的には「目覚めた」状態で対象化し記述しているという舞台設定自体が、まさしく「目覚めて眠る人の夢」であると言える。つまり、『序説』においては「通常的思考」とメタ意識との対比が「眠る人の夢」と「目覚めて」という言葉の対比のうちに比喻として捉えられていたのが、『アガート』においては舞台設定そのものの内に捉えられているのである。たしかに、『アガート』には「意識」という単語そのものは一度も現れていない。しかし、『序説』の方から『アガート』を見ると、『アガート』は、覚醒したメタ意識による「通常的思考」の記述という「心的二重生活」のテーマを、「目覚めて眠る人の夢」という純粋な舞台設定そのものによって、極端におしすすめた試みであると言って差し支えないように思われる。逆に言うと、『アガート』の試みは、「目覚めて眠る人の夢」というL10の比喻の内に既に萌芽として予告されていたとすることができる。

次に、L10と『アガート』の第二の類似点は、「通常的思考」の中に存在すると仮想された法則をなんとかしてつかまえようとする強い欲望が現れ、しかも、その欲望は決して成就されることがないという点である。L10でヴァレリーは「心的二重生活のある一点に至ると」通常的思考の流れが「規則性」と「連続性」をもって展開されているように見える、と書いている。「目覚めた」メタ意識によって、「通常的思考」の展開の中に規則性や連続性、言い換えれば、法則性が見えてくる瞬間がある、とヴァレリーは言うのだ。つまり、「通常的思考」に法則の存在が仮想されているのである。ただし、「通常的思考」が法則性をもって展開するように見えるのは、あくまでもメタ意識状態における「ある一点」に至った場合でしかない点に私たちはまず注意しておかなければならない。

さて、そのメタ意識状態についてヴァレリーは、実は、L 9で、「思考のオペレーションについての意識は [...] 極めて強力な精神においてすら稀にしか存在しない」¹⁰とはっきり書いているのである。すなわち、メタ意識状態というのは恒常的・習慣的な状態ではなく、「稀にしか存在しない」状態なのだ。

したがって、「通常の思考」の中に仮想された法則を把握する試みは、現実には、二重の困難を背負っていることになる。第一に、メタ意識状態そのものが恒常的・習慣的な状態でなく、しかも第二に、法則性が見えるのはメタ意識状態の「ある一点」においてでしかないからである。このような二重の困難にもかかわらず、ヴァレリーは「思考の法則」に対する欲望を捨てない。ヴァレリーは、「通常の思考」に何等かの法則性が予感された時、「次々と続いてゆくもの[通常の思考]の流れを速め、その流れの諸項をその**極限**、諸項の想像しうる限りの表現(式)の極限まで、**そのあとではすべてが変化してしまうであろう極限まで運ぼう**という考えあるいは欲望」¹¹が現れると書き付けている。「通常の思考」の法則性をつかまえ、「通常の思考」を構成する「諸項」を「極限まで運ぶ」すなわち「諸項」のあらゆる可能な組み合わせを汲み尽くしたいとするヴァレリーの極限志向には、特殊な自我を越えて普遍的な自我に脱皮したいというヴァレリーの実存的な欲望が感じられる¹²。しかし、極限への到達は、あくまでも「仮に意識的であるというこの様態が習慣的なものになれば」という極めて困難な条件つきなのである。したがって、「通常の思考」の中に法則の存在を仮想し、その法則を把握して極限を越えようとする欲望は、現実には実現が不可能であることによって、欲望であり続けるほかはない。このような、『序説』における思考の法則に対する成就されない「欲望」のテーマはそのまま、『アガート』第二節および第八節に現れる「欲望」のテーマと直結するだろう。

まず、第二節を見よう。「私」は「自分の欲するはかない思念」を書こうとし

¹⁰ OEI 1161

¹¹ 「表現」の原語《expressions》は数学的には「多項式」などという時の「式」の意味である。この箇所には、通常の思考を複雑な多項式と捉えるヴァレリー独特の考え方が見られる。「想像しうる限りの表現(式)の極限」とは、思考の多項式のあらゆる組み合わせの可能性をすべて汲み尽くし終わる執着点という意味に解釈すれば、その執着点すなわち極限に達したあとは、思考の多項式そのものがまったく別のものになる必要がある。つまり「極限のあとではすべてが変化してしまうであろう」ということになるわけである。

¹² 1894年の夏に、まるで堰を切ったように、『序説』『テスト氏』『カイエ』を書きはじめたヴァレリーの精神の深層には、感情的な危機と文学的な危機に苦しむ特殊な自分を消去したいという強烈な自我革命の願望があったのではないか。少なくとも『序説』のテキスト場には、書き手の情念的なエネルギーを感じさせる部分が多いように思われる。

て、手を加えようとするのだが、その「はかない思念」はすぐに眠り込んでしまう。しかし、それを死から救って、なんとか固定化したいという欲望は消えない。

仮に一度、私がそれらを急き立て、それらが消えてしまう前につかまえることができ、それらを数瞬間以上ははっきりと目にみえる形で保持しておくことができたとして、自分では努力によってそれらを深化できたと思っても、結局のところ、私ができることは新しい諸形式に移行することだけなのだ。(A G 2)

「急き立てる」「それらが消えてしまう前につかまえる(それらの死の速度を上回る)」という表現の内に、『序説』における「次々と続いてゆくもの[通常の思考]の流れを速め、その流れの諸項をその極限まで[...]運ぼう」とする欲望と同じ種類の欲望が感じられる。また、「はかない思念」という表現自体に示されている救うことの困難さが、『序説』におけるメタ意識をめぐる二重の困難と同じく、「欲望」の成就を不可能にしているという構図も同じである。思考の法則の把握が不可能に近いこと、あるいは、「私の欲するはかない思念」の把握が不可能に近いこと、その不可能さゆえに、「欲望」の実現は、『序説』でも『アガート』でも、「仮に」困難な条件が克服された場合の話として記述され、実際には「欲望」は満たされぬまま「欲望」であり続けているのである。

同じことが、第八節についても言える。第二節では「私の欲するはかない思念」という控え目な表現であったものが、第八節では単刀直入な形で、「通常の思考」の中にある「法則」という表現に発展し、次のように語られる。

私はある侵入不可能な円環の縁にもどってきたようだ。私は確信している、その円環の中に私が長く楽しめる何かがあることを。簡潔にして普遍的な何か。日々の思考の襞の中を、一粒の抽象的な真珠が、将来、転々と転がっていくだろう。ある驚くべき法則、それを追求する者と一体となった法則がそこに住まうだろう。その真珠が垣間見られる一瞬があるだろう。いくつかの言葉がそれを永遠に提示するだろう。(A G 8)

『序説』で「通常の思考」に法則が仮想されていたのと同様に、ここでも、「通常の思考の襞の中」に「ある驚くべき法則」が「確信」をもって仮想されている。しかし、ここに現れる四つの動詞がすべて条件法に置かれている事実が示すように、「法則」の把握は現実には成就されていないのである。『序説』における「極限」への欲望と同じく、『アガート』の「私」も、「いかなる侵犯に身をさらしたこともないその場所」すなわち「ある驚くべき法則」を包んでいる「侵入不可能な円環の中」を「我が物にしたいという欲望を抱く」。しかしながら、「円環」は初めから「侵入不可能」という条件付きなのだ。

『序説』において、「通常の思考」の法則の把握がメタ意識をめぐる二重の困難によって不可能に近かったのとまったく同様、『アガート』における「私」が追い求める「法則」の「把握」もまた実現不可能な「欲望」なのである。したがって、現実には「私」が見出したのはどこまでも「欠如」にすぎない。

以上に見てきたように、L 10 と『アガート』には、目立った共通点が二つある。第一に、「通常の思考」とそれを観察するメタ意識の関わりを示す「目覚めて眠る人の夢」のテーマ。そして第二に、仮想された「思考の法則」をつかもうとする欲望の存在と、しかし、その欲望の成就是、困難または不可能な条件を付けられて、事実上あらかじめ禁じられているという構図である。そして、この構図そのものが、二つのテキストに、精神の苦行という印象をあたえているようにも思われるのである。

1-3 球面を移動する任意なるもの

それでは次に、L 16 と『アガート』の類似に眼を転じてみよう。L 16 は、若いヴァレリーが、世界を観る自我について、抽象的なモデル化を大胆に試みた、力のこもった箇所である。まず、前半部を見よう。

観る者は決して砕けない球体の中に取り込まれている。そこにはやがて諸々の運動や事象となるであろういくつかの差異が存在しており、球体の表面はそのあらゆる部分が新しく入れ代わったり球面上を移動したりするが、閉じたままである。 [...] やがてこれらのまったく任意の諸形態 [...] の中から善きもの、悪きもの、穏やかなるものが訪れてくるように観る者は感じは

じめる。そしてこの段階で緩慢にあるいくつかの形態は忘却されはじめ、もはや見えるか見えないか程度のものになりはじめる一方で、他のいくつかの形態は知覚されるに至る——それらはずっとそこにあったのであるが。¹³

この箇所には、『アガート』との目立った類似が二つ露呈している。

第一に、「球体」のイメージである。ヴァレリーは、世界を認識する自我をモデル化する場合に、しばしばこのような「球体」のイメージを用いる¹⁴。『アガート』においても、例えば第四節の「閉所」や「私の固有の球体」といった表現に明らかなように、やはり閉じた球体のイメージが現れている。

第二に、最も注目し値するのが、「任意の」という形容詞である。『序説』では、球面上で新しく入れ代わったり移動したりする「差異」が「これらのまったく任意の諸形態」という言葉で受けなおされている。一方、『アガート』における「私」の「特異な閉所」では「私の諸々の存在たち（私の任意の存在たち）が等しなみに現れては消える」のである。『序説』と『アガート』のいずれにおいても、球体の表面（あるいは中）で「任意の」諸形態（あるいは存在たち）が等しく運動しているイメージが共通である。

このような、球面を移動する任意なるもののテーマは、『序説』と『アガート』を結ぶ重要な鍵の一つであろう。というのも、L 16 前半部は、「任意なるもの」が「我が存在の中天」で「あるがままに燃えている」（AG 11）『アガート』の世界を先取りした、思考の、言わば、原初状態を描いた部分と見なすことができるからである。しかし、『序説』と『アガート』との間に共通するテーマが存在しているとすれば、それはここまでである。L 16 の記述は、次第に、『アガート』との違いを鮮明にする方向へと進んで行くのだ。

第2節 思考の昼と夜

¹³ *CEI*, 1167

¹⁴ 例えば、『序説』執筆と同時代の『カイエ』の断章。「私は球体によって表象の場を表す。その時我々は連続継起するが常に完全で閉じた球体だけを認識する。球面の部分においては様々な移動や変化が起こり得る。」(*C, EI*, I, 122)

2-1 時間の昼と夜

L 16 後半部の分析に入る前に、時間の問題に触れておく必要がある。小論の初めに指摘したように、思考の本質は「変化」にあるとするのがヴァレリーの基本的な立場であった。変化は、言うまでもなく時間の不可逆的な流れを前提としている。しかし、この時間の流れ方が、『序説』と『アガート』とでは決定的に違う。『序説』の時間は通常の間と言えが、『アガート』の時間は特異な時間なのである。

『アガート』における時間の描写を少し拾ってみよう。第一節には「時間の経過もさだかではない」「私の時間」という表現が見られる。この二つの表現だけをとっていても『アガート』の時間が特殊な時間であることがわかるだろう。そして、第三節には、より明確に「通常の時を刻んでいないこの刻限に」という表現が現れる。

通常の時を刻んでいないこの刻限に、私のこれまでの歴史など何の意味があろう。私は個人史を書物のように軽蔑する。今ここにあるのは純粋な機会だ。思い出からその耐え難い秩序を取り除き、 [...] 私は私の精神を偶然へ向かって舵取りする。(AG 3)

『アガート』を流れる「通常の時を刻んでいない」時間においては、「歴史」や「書物」で代表される固定されたものは意味を持たない。そこでは、「思い出」の秩序も排除され、精神は「偶然」に委ねられている。ヴァレリーにとって思考の本質が変化にある以上、時間の変化の仕方が異なれば、思考の仕方も自ずと違ってくるのは当然であろう。実際、『アガート』を流れる特異な時間にあっては、思考の仕方もまた通常の時のそれとはまったく違っている。

認識の脈絡を絶えず支える予測機能は不在である。私にはもはや心底に住むとめどないシビラの呟きが聞こえない。(AG 4)

ここに現れる「シビラ」とは、昼の時間の流れの中で、絶えず「予期」「予見」を実行し、「計算し」「加算する」昼の思考の象徴である。シビラは、言わば、

『序説』のレオナルドなのだ。しかし、『アガート』の「私」は、「偶然」が支配する「純粋な機会」、すなわち、昼の時間とは異質な夜の時間を生きているため、昼の思考をすることができない。「私」にはシビラ＝レオナルドの眩きは聞こえないのである。

2-2 思考の昼と夜

さてそれでは、いよいよL 16 後半部の分析に入ろう。ヴァレリーは前半部末尾で、「まったく任意の諸形態」の中から「いくつかの形態は忘却され」る一方、「他のいくつかの形態は知覚されるに至る」と書いていたが、それから先の部分では、昼の思考に特徴的な、想像力による「上昇」と「拡張」の様子が描写されるのだ。『アガート』においては不在だった「シビラの眩き」すなわち「認識の脈絡を絶えず支える予測機能」が、L 16 後半部では全面的な開花を見せているのである。

ヴィジョンの広がりの上でいくつかの場所が強調される、[...] 観る者が夢想へと上昇していくのはこの時点からであり、これ以後観る者は初めのよりよく知っている物象からくる特殊なさまざまな性質をますます数多くなる物象へと広げることができるだろう。先行する空間を思い出すことによって観る者は所与の空間を完璧化する。そして、観る者は自らの連続継起する諸々の印象を整序したり解体したり思いのままにできる。[...] 観る者は諸々の部分が自分に与えられているところの見えない全体を思い描きたいと望み始める。¹⁵

私たちは、ここで、「上昇する」「広げる」「完璧化する」「整序する」「解体する」「思い描く」といった意志的な動詞が畳み重ねられている点に注意しよう。所与の事物からの「上昇」、所与の事物の「拡張」、所与の部分から見えない全体を思い描くことといった想像力のテーマは、想像力論として¹⁶の『序説』

¹⁵ *ŒI*, 1168-1169

¹⁶ ヴァレリーは後年の『カイエ』でこう書いている。「私は最初のレオナルドの中で想像力の問題を考察し、その可能性と限界を考察しようとした。」(C, XIX, 301) また、『序説』について国家博士論文を書いたジャンヌ・ジャラは『序説』を想像力論として位置づけ、『序説』の理論的な側面を詳しく分析している。Jeannine Jallat, *Introduction aux figures valéryennes*, Pacini, 1982.

において最も重要な主題系である。例えば、鳥の飛翔という部分的な運動からそれが産み出す空気の層という全体的な形を想像したり、投げられた石の部分的な運動からそれが軌跡として描き出す全体的な曲線の形を想像する。このような身近な例¹⁷をはじめとして、磁石の周囲に鉄粉が形作る相称的な曲線の部分的な観察から一見空虚な空間全体を飛び交う相称的な「力線」の充満を見抜くファラデー的な発見的想像力の例¹⁸に至るまで、『序説』には、想像力による部分から全体への「上昇」「拡張」の主題が至る所で鳴り響いている。

『序説』で描かれる思考は、「飽くなき厳密」¹⁹を座右の銘にしながら無数の形態に満ちた外界に注意深い眼差しを向け、対象を整序し、様々に組み合わせ、構築する思考である。レオナルドの思考は、「上昇」「拡張」あるいは「構築」といった積極的・意志的な言葉で代表される思考であり、部分から全体の把握へ、無秩序から秩序へ、意識的に向かう思考なのである。

ところが、『アガート』に描かれている思考は、積極でも消極的でもない。レオナルドの思考のように「上昇」や「拡張」の方向には向かわず、「思念の純然たる実施」(AG 3)という一句が集約的に表している通り、次から次へとただ「純粋に」思考が実施されるだけなのである。『アガート』における思考は、言わば、中立状態・ゼロ次元にあって、所与の部分から出発して見えない全体の想像へと上昇することがないため、「すべてが私には部分的に見える」(AG 3)わけである。『序説』において描かれる思考の大部分が上昇する思考であるとするれば、『アガート』における夜の思考は上昇する思考ではなく、ただ純粋に変化していくだけの思考であると言えるだろう。

見方を変えれば、昼の思考がある目的に向かって進む志向的なものであるのに対し、夜の思考には目的志向性がない、ということもできる。『アガート』は『序説』に比較すると、思考に目的がないという点で、思考の劇の舞台が「純粋」なゼロ次元に置かれていると言えよう。たしかに、先に見たL 16前半部のように、『序説』の中にも、「上昇」や「拡張」や「構築」に至る以前の星雲的な段階、思考のアモルフな源初段階、「まったく任意の諸形態」が球面上を等しく移動している薄明の時が描かれてはいる。しかし、その先は昼の思考が始まるのであっ

¹⁷ *ÆI*, 1169

¹⁸ *ibid.* 1195

¹⁹ *ÆI*, 1155

て、球面上を移動する任意のものたちは、やがて名前と形をあたえられ、発見的・構築的な想像力の発動を促すに至るのである。

『序説』で描かれる思考の多くは、空虚の中に相称的な充満を見抜く発見的な想像力の働きであり、諸々の事物の様々な組合わせを経て優れた構築へ至ろうとする昼の思考である。つまり、力強い想像と構築のための思考、明確な目的に向かって進む方法的な思考なのである。それに対して、『アガート』で描かれる思考は、目的がないために、方法的であるはずもなく、そこでは、思考そのものの変化の姿、ヴァレリーの用語で言う「自家変動性」が、混じり気なく純粹に描かれているのである。

言い換えれば、『序説』でヴァレリーが書こうとしたのは、『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』という表題に明らかなように、卓越した世界認識と豊かな構築のための思考の一般的な方法論なのであった。それに対して、『アガート』でヴァレリーが書こうとしたのは、思考の方法論ではなく、「精神の裸形」(AG 1)あるいは思考の変化の様相自体とその原理であったと言えるだろう。

『序説』における昼の思考と『アガート』における夜の思考との相違点を述べてきた終わりに、より具体的なレベルでの差異を一点だけ指摘しておきたいと思う。それはイマージュの連続継起の仕方についてである。イマージュの運動の観点から言えば、昼の思考は「アナロジー」的であると言える。『序説』におけるレオナルドのダイナミックな想像力の働きを活写した部分は、形態的なアナロジーによるイマージュの連続継起をリズムカルに表していて、『序説』の中でも特に軽快で美しい。例えばL 27の次のような記述。

土塊や石の落下が見せる迅速さや緩慢さから、塊の湾曲から襞の多い飾り布へ、屋根の上に伸びる煙から遠くの高木へ、地平線上に霞むブナの木へ、魚から鳥へ、海に映える太陽のきらめきから白樺の葉の無数の薄鏡へ、魚鱗から入江の上を移動する輝きへ、耳や巻毛から貝殻の凝結した渦巻へと、彼は行く。彼は貝殻から波のこぶ状の盛り上がり渦巻く様へ、浅い池の表面からその表面を温めているらしい水脈へ、匍匐の基本的運動へ、流動する蛇へ

と移って行く。²⁰

ここで、思考の変化を支えている主要な機能は明らかに、形態的なアナロジーの働きである。レオナルド的精神がイメージAからイメージBへと軽快に運動する時、Aの項とBの項は「形」において類似性があり、アナロジーの論理で連結可能である。相互に独立した二つのイメージAとBが、類似性という一点において関係づけられているのである。実際、ヴァレリーはレオナルド的精神を「数多くの形の間は無数の純粋な関係を織りあげた怪物的頭脳」²¹と呼び、レオナルド的精神または最高の知性の持ち主たちの秘密は「我々にはその連続性の法則が捉えられないところの事物の間に、彼らが見つけた、見つけざるをえなかった諸関係の中にあり、その中にしかありえない。」²²と言っている。相互に独立した事物・イメージの間に、「連続性の法則」を捉え、無数の関係を織りあげるのは、精神の卓越したアナロジー能力に拠る。レオナルドはアナロジー能力を大いに発揮し、諸々の事物の間に無数の関係の網の目を紡ぎ、所与の事物を組み合わせ、上昇し、拡張し、構築するのだ。

一方、夜の思考はアナロジー的ではない。昼の思考では思いもよらないイメージが連続する。例えば、『アガート』第一節では、「貧しい光」のイメージの次に「生気のない通りすがりの人の頬」のイメージが続き、さらに「私に向かって微笑む無意味な人の貌」のイメージが継起する。あるいはまた、「破片」のイメージの次に「馬の凍るように冷たい尻」のイメージが連続する。このように、『アガート』においては、AからBへイメージが継起する時、アナロジーの論理は稀薄なのだ。すなわち、『アガート』における形態的なイメージはすべて「自然発生的な形象」(AG1)であって、アナロジーによる意志的な操作が産み出したイメージではないのである。

以上に見てきたように、思考の昼と夜とでは、まず基本的に時間の性質が異なることから、思考の変化の仕方そのものに、上昇性と非上昇性、目的志向性と非志向性、想像におけるアナロジー論理の有無といった明確な差異が生じているのである。

²⁰ *CEI*, 1176-1177

²¹ *ibid.* 1154

²² *ibid.* 1160

2-3 思考の裸形

1895年に思考の昼の描写に挑んだヴァレリーは、1898年から数年間、思考の夜または思考の裸形の描写に挑んだ。私たちは、その試みの一つの到達点を『アガート』第十節および第十一節の内に見ることができる。

まず第十節では「精神」の定義が簡潔になされている。ヴァレリーによれば、精神とは、「せめぎあっている様々な知識の総体」から構成される「私」であり「一つの体系」である。ここでの「私」は、主体の位置ではなく客体の位置に置かれ、特殊個別性を剥奪された非人称的な存在であることが示されている。しかも、この「私」ないし「一つの体系」は、近接過去から切り離され、「今」あるものとして、現在性が強調されているのである。そして第十一節では、思考の裸形が見事な詩的比喻の力によってこれもまた簡潔に力強く描かれる。

ここにおいて、平和の上に輝きわたる、臨機応変こそこの世の主であり、観念は自らが出現する地点と密接に結び付いているという理が。

一つの観念が自ずから立ち上がり、いま一つの観念に取って代わる。どの観念も機を得て姿を現す時に最大限の力を発揮する。[...] 我が存在の中天には、存在する唯一のものが、あるがままの姿で燃えている。任意なるものが。(AG 11)

「臨機応変」とは適時性を意味する。この一語の中に、思考の本質を変化と捉えるヴァレリーの考え方が凝縮されていると言えるだろう。せめぎあう一つ一つの観念たちが、時宜を得て、「我が存在の中天」に立ち上がり、燃えて、別の観念に中天の座を譲っては消えていく。

「任意なるもの」という表現から私たちは、先に見たL 16前半部の、球面上を移動する「まったく任意の諸形態」を思い出す。『序説』において既に萌芽状態にあった、思考の裸形を表象するテーマは、この『アガート』という思考の劇で徹底的な展開を見たのである。目的のない夜の思考は、絶えず変化するだけの裸形の思考であり、諸々の存在たちや観念は、その特殊個別的な価値を捨象され、「存在の中天」で燃えては消えていく等価物として抽象化されている。純粋な変

化のみが支配するこの思考の夜の劇においては「任意なるもの」が俳優であり、俳優たちの出番は唯一「適時性」によって決まるのである。

ヴァレリーは『序説』で敷いたレールをさらに困難な未開拓地にまで延ばし、精神機能の記述における一般性の度合をここまで高めた。たしかに、『アガート』は結局ヴァレリー自身の手によって完成されることなく未完に終わったテキストである。しかし、この未完のテキストは思想家ヴァレリーと詩人ヴァレリーのエッセンスを複雑に潜ませた問題性の多いテキストであることは間違いないのである。

以上、小論は、主に『序説』の第十段落・第十六段落と『アガート』を読み比べながら、共通点と相違点の浮き彫りを試みた。根本的に両者は思考の一般的記述を目指している。共通項は、メタ意識による「通常的思考」の観察のテーマ、思考の法則をめぐる成就されない欲望のテーマ、思考の源初状態の表象のテーマである。相違点については、時間の性質の差異、思考の上昇性と非上昇性、目的志向性と非志向性、アナロジー論理の有無を概括的に辿ってみた。

それにしても、ヴァレリーが作る思考の劇の、昼の部と夜の部は、ともに、観る者＝読者を疲れさせる。とりわけ、ヴァレリー自身がその困難な試みに絶望し、生前は結局日の目を見ることなく闇に埋もれていた『アガート』は、様々な研究が積み重ねられつつある現在、圧倒的な密度でそこにある。この迷宮を明るく見通す仕事は至難と思われるが、しかし、ヴァレリーが1919年の『註と余談』で言っているように、「難しくないものは、価値がない」²³のである。

²³ 《qui n'est pas difficile est nul.》 (Æ I, 1217)